



論文掲載を喜ぶ生徒と一島圭教諭(右端) 萩高校

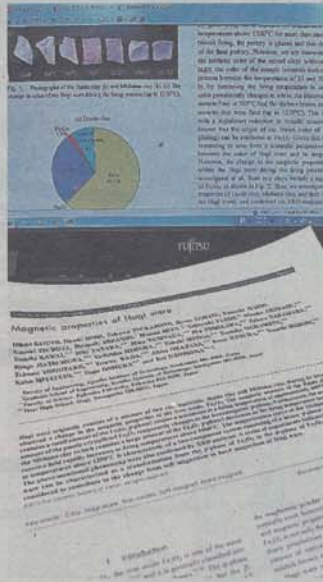
萩焼特性に 科学の視点

萩高生、学術誌に英語論文

九工大生ら協力

萩高校(山口県萩市)の生徒たちと九州工業大学(北九州市)の学生や教員が協力し、「萩焼の磁気的特性」と題した英語の論文を書き上げた。日本セラミックス協会発行の学術論文誌に掲載されたほか、インターネットを通じて世界に発信されている。

萩高の理数科の生徒たちが「地域の文化に着目し、科学的な視点から伝統工芸にアプローチしよう」と2012～13年度、科学技術振興機構のサイエンス・パーク(使い込むほどに風合



日本セラミックス協会のサイトにアップされた論文

いが変わること)「赤み」を生み出す要因を解明するため、萩焼で使う大道粘土、大道・見島混合粘土など4種類を焼いて強度などの割合をさまざまな機器で調べた。

その結果、「やわらかさ」と「七化け」は焼き物に隙間が多いために起こり、「赤み」は酸化鉄が関係していることがわかったという。

昨年1月、校内で開かれた発表会で、こうした成果を報告したところ、指導と助言をしてきた九州工業大の美藤正樹教授らが高く評価し、論文にまとめるようアドバイスした。

14年度には同工学部の学生たちと共同研究に取り組み、赤みの変化は酸

化鉄の磁性の強弱と関わりが深いことを解き明かした。

成果はA4判の学術論文誌(8月号)に7ページにわたって掲載された。卒業生を含む計17人の生徒の名とともに先月から日本セラミックス協会のサイトにもアップされている。高校と大学の共同研究や論文投稿は珍しいという。

萩高の生徒たちは「萩焼は子どものときから親しんでいる。今回、科学的な調査に携わることができ、興味がいよいよ深まった」。指導した一島圭教諭は「先輩から後輩へと受け継がれた研究が形になり、子どもたちは達成感を感じている。地域の伝統を広く世界に知ってもらおう機会になれば」と話している。

(佐藤彰)